本時の振り返り

1 第１学年『あわせて　いくつ　ふえると　いくつ』　(1/7)

2 本時の概要

「先生たちのお手玉の数を合わせる」という場面から、ブロックを使ったり図をかいたりして「合わせて５になる」ということを考える。「３と２を合わせて５になる」ということを式で表せることを知り、問題の意図を捉えて式・答えを導くことができるようにする。

3 実践の振り返り

(1)「合わせて５になる」ことを実感する

本時では、「３と２を合わせると５になる」ということをおさえることが重要であった。児童の中には「３＋２＝５」、「２＋３＝５」といった考えを出せる子もいたが、その前段階として、手元のブロックを用いて「合わせて５になる」ということを実感することが非常に大事であった。１年生の６月という段階では、図や言葉だけで考えを表現することは、児童にとってまだ難しい。今後様々な表現方法を身に付けていくためにも、①場面絵にブロックをのせる→②ブロックを並べる→③図に表す→④言葉で説明する　の①②③までは全員でしっかり確認をさせていきたい。一斉にブロック５こを手元に出し指で合わせてみたり、図を丸で囲ってみたりして、「合わせて５になる」ことをブロックで何度も確認することでその意味が分かり、他の表現方法へとつながっていく。一つ一つの段階の指導を丁寧に行い、表現方法を豊かにさせていきたい。

(2) 考える材料をもつ

答えは分かっても自分の考えをうまく表現できなかったり、そもそも自力で考えることができなかったりする児童がいる。そういった児童のためにも、手元に場面絵を準備したり、ブロックを動かしたりできるように、考える材料をもち、選択できるようにさせる。

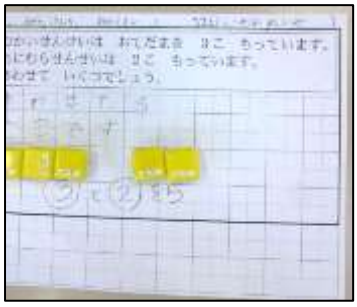
4 協議内容

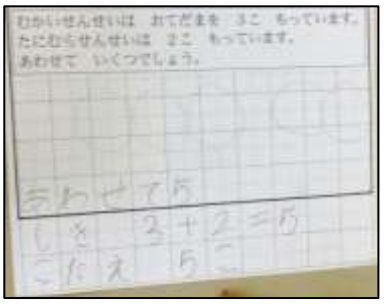
良かった点

・板書が整理されていて、分かりやすかった。
・ノート指導が丁寧で、取り組みやすい。
・子どもの発言をていねいに取り上げていた。
・生活科の昔遊びと結びつけた指導となっていた。
・考える時間が確保されていた。

改善点

・時間配分をもう少し考えるとよかった。
・「２＋３」の反応が出てきたのは問題文で担任の先生のお手玉の数が２だったので、先に２を出している。だから、問題文に具体的・現実的な名前を入れるべきではなかった。１組でやった時は「３＋２」の反応が素直に出ている。つまり、３は１組の担任だったからだ。
・答えは分かっているが、上手く説明できない子への手立てを考える。
・式よりも答えを聞く問題だった。５になったことを大げさに認めるとよい。
・「あわせて」という言葉を、ブロックを使って全体で表す活動を多く設定する。
・「合わせる」という言葉をもっと確認した方がよいのでは。（様々な場面で、意味を分からせる。）
・子どもが具体物を操作する時間をとりたい。
・考える材料として、場面絵があるとブロック操作に結び付けやすい。
・問題文として問題を出していたが、本時の段階では絵や動作だけの問題でよい。実際、教科書はそのような扱いになっている。文の形にすることを急ぐ必要はない。





5 指導講評　講師：小島　宏 先生

・作業的な活動を一緒にやらせ、追体験させていくことを大事にする。
　ブロックを動かす活動を何度もさせ、教師の模範や友達の考えを自分のものとする。
・数値に徹し、授業の流れをシンプルにする。
　今回の授業では、「３＋２＝５」と「２＋３＝５」のどちらが正しいかというところに時間が割かれていた。「あわせて５」、「３＋２＝５」を重視し、授業の流れをシンプルにする。
・自力解決ができるように、支援するタイミングや仕方を工夫する。
　自力解決が難しい児童に関しても、支援の方法を考え、なるべく児童が自力で考えられる時間を確保する。支援のタイミングに関しても、児童が一人で考える時間を確保した上で、支援をする。
・あてはめ問題は、素材を児童が実際の場面をイメージしやすいものにする。
　今回のあてはめ問題では、あやとりを素材としていた。例えばおはじきの方が、普段の生活の中で数える習慣があるのではないか。普段の生活と結び付いたもので、問題を作っていく。